



TITLE:

18 野生ニホンザル・オスグループ における長期モニタリング調査 (X.共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

宇野, 壮春

CITATION:

宇野, 壮春. 18 野生ニホンザル・オスグループにおける長期モニタリング調査(X.共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 2009, 39: 118-118

ISSUE DATE:

2009-09-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166659>

RIGHT:

用時期が限られる金華山では、受胎がより高く見込まれる場合にのみ排卵が起こり、少ない排卵回数でより確実に受胎すると考えられる。さらに、エネルギー的には「無駄な」受胎後の交尾も金華山では起こらないと考えられる。

17 農作物被害を与えるニホンザルの遊動に影響を及ぼす生態的および人為的要因

水田量太 (山口大・院・理工学)

対応者：半谷吾郎

野生ニホンザルの土地利用は食物生産量や分布に影響を受けるが、これら生態的要因以外にも、農作物の生産量や追い払いなどの人為的要因も遊動に影響を与えると考えられる。そこで本研究では、農作物被害を与えるニホンザル一群を対象に土地利用を調べ、これに影響を及ぼす生態学的・人為的要因を明らかにすることを目的とする。調査は、山口市仁保地区において、山口A群を対象に2008年6月から2009年2月まで行った。毎月7日間、ラジオテレメトリーによる追跡を行い、群れの遊動距離および土地利用割合を調べた。また、群れの追跡中に追い払いが行われた場合、その状況も記録した。さらに、遊動域内の林縁から50m以内にあるすべての農地について、利用可能量を毎月調査した。記録した追い払いは21例(夏6~8月:10例, 秋9~11月:3例, 冬12~2月:8例)あり、その方法はいずれも一人で花火を用いて数分間行われたものであった。追い払いがあった日のサルの1日の遊動距離は、夏では、行われなかった日に比べて長かった(1.31km vs 1.01km)。しかし、冬では、一時的な逃避行動は見られたものの、遊動距離に変化はなかった(0.66km vs 0.63km)。サルの土地利用について、夏は冬に比べて、アカマツ群集を含む自然植生の利用割合が高く、一方冬は植林を含めた針葉樹林の利用割合が高かった。農地の利用可能量は年間を通じて高かった。これらのことより、人による追い払いの効果は季節によって違いがあることがわかった。これは、森林の食物資源が乏しい冬では農地への依存度がより高くなり、追い払いの効果が弱まったためと考えられる。

18 野生ニホンザル・オスグループにおける長期モニタリング調査

宇野壮春 (合同会社宮城・野生動物保護管理センター)

対応者：半谷吾郎

過去7年弱の調査から金華山のオスグループは一

つの群れ周辺でワカモノ(4~7才)を中心としたメンバーシップを保ち、それらが年齢を重ねることで群れオスとなる傾向にある。ただし、すべての個体が定義する群れオスになれるのではなく、群れオスとなったのはこれまで5頭のみで、これは観察したオスグループのメンバーの3割から4割程度であった。そしてオスグループを経ないで群れオスとなった個体は観察されていない。また、今年度の調査では以前のメンバーとオスグループの親和的交渉が観察された。オス同士はグループを離脱した後も決して敵対的ではなく、お互いの記憶や過去の仲間意識は消えていないことが明らかであった。

つまり、オスグループは群れオスへの加入という面から見ればもちろん重要な期間であるが、オス同士のつながりとしての側面もまた兼ね備えていることが示唆される。

19 ヒトを含めた真猿類の下顎骨形態に対して歯牙形成が与える影響を内部構造から探る

深瀬均 (東京大・理・人類)

対応者：高井正成

下顎骨形態と歯牙形態との関連性を調査したこれまでの研究では成体の下顎骨の外部的な計測と歯冠サイズの計測によるものが多く、歯槽部に収容されている歯根のサイズや、成長過程にある下顎骨とその内部で形成される歯胚のサイズ・配置関係等に関しては非破壊的な調査法に限られることもあり体系的な調査がほとんどなされていない。そこで本研究では、ヒト、チンパンジー、ニホンザル、そしてマントヒヒの成長過程にある下顎骨標本をCT撮影することにより、個体発生と内部構造という新たな観点から歯と下顎骨の形態学的関係性を調べることを大きな目的としている。

現時点では犬歯サイズと下顎体高との関連性について調べるため、犬歯の雌雄差が真猿類でも大きいマントヒヒを主な対象として解析を進めている。第一に、成体において下顎骨形態の雌雄間比較を行った結果、オスではメスよりも下顎体高が相対的に前方部で高くなる傾向が観察された。また、下顎骨正中部の断面形状(高さとの比、主軸の傾き、superior transverse torusの相対的高さなど)を比較した場合、有意な雌雄差はみられなかった。続いて、歯牙年齢を基に、下顎骨形態・歯牙組織サイズに関する成長パターンの雌雄間比較を行った。結果として、歯牙年齢3-4才までは下顎骨サイズ及び歯胚サイズに関して、雌雄差は観察されなかった。その後の成長過程において、メスに比べてオスでは犬歯の歯胚サイズがさらに拡大し続け、同時に下顎体後方部に対